

開拓使の放火がきっかけになった

消防事始め

市民を恐ろしい災害から守る消防のルーツを探ってみます。

札幌の消防の歴史は明治五年（一八七二年）に組織された私設消防組の「中川組」から始まったといわれています。

当時、札幌の大半の家屋は笹ささや茅かやを使った草ぶき小屋で、火には全くの無防備でした。草ぶき小屋から出た火が草原に燃え広がって、ようやく整いだした市街地を襲うこともしばしばあり、開拓事業の妨げになっていました。

このため、開拓使は草ぶき小屋を禁じ、建設資金を貸し与えて板壁の小屋を建てるよう奨励するなど対策を講じましたが、なかなか徹底しませんでした。

そこで、業を煮やした開拓使判官の岩村通俊いわむらみちとしは自ら模範を示すように、官設の貯材所や草ぶき小屋に火を放ち、焼き払いました。この「御用火事」と呼ばれる開拓使が行った放火により、まず官設の草ぶ

き小屋が一掃されると、その影響から民家も次いで改築されました。

この御用火事の際に、民家への延焼を防ぐ目的で生まれたのが、開拓使御用請負人の中川源なかがげん左衛門ざえもん率いる中川組でした。岩

村の命を受けた中川は、消防に経験のあるとびの者や職人約百七十人を集めて警備に当たり、御用火事後も活動を続けるようになりました。

しかし、不景気の影響や開拓使の事業縮小のありを受け、中川組のような請負人個人の統率による私設消防組は、職人の分散などで弱体化し、次第に組織の維持も難しくなってきました。

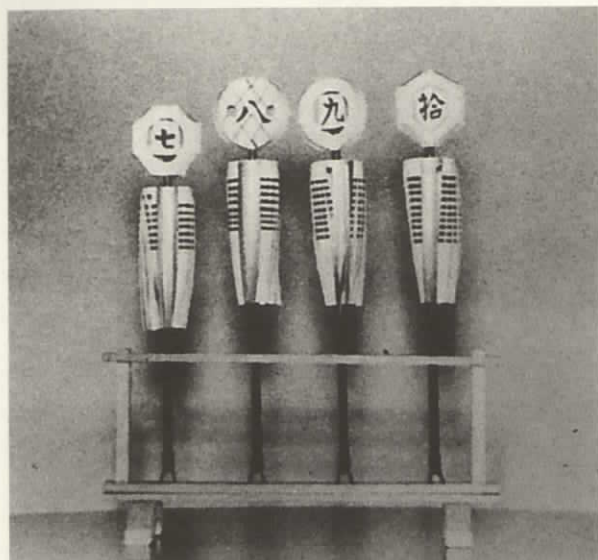
そこで、明治六年になって、中川組に代わる区立



明治初期の消防組
(昭和63年刊「さっぽろの消防」より)

自衛消防組がつくられることになり、一組三十人の消防組が五組編成されました。この当時の消防夫は、大工や左官、魚屋など職人氣質で血気盛んな者が多く、江戸時代の火消しの伝統を色濃く残していました。

消防組の番屋には竜吐水（ポンプ）も備えられましたが、依然として燃え盛る家屋の風下に纏（まと）を持って



纏の模型（昭和46年刊「札幌消防百年のあゆみ」より）

て立ち、延焼を防ぐという体を張った消火が行われ、時には先陣争いのいさかきを起すこともあったといひます。

その後、ポンプ自動車やはしご自動車といった近代的な装備が登場するなど、時代とともに強固な防災体制が整っていき、消防組も幾多の変遷を経て現在の札幌市消防局へと発展していきました。

当時と比べ、消防を取り巻く環境は目まぐるしく変わりましたが、市民を守るため災害に立ち向かう気概は綿々と受け継がれています。

（平成十三年二月号・第七十五回）